臨床検査体験イベント「検査 de フェスティバル」にて導入した視野検査の有用性

◎鈴木 雄太[1)]、田中 真輝人[2)]、岩崎 澄央[3)]、和田 妙子[3)]、岡田 一範[4)]、米澤 仁[2)]、近藤 啓[5)]、木田 秀幸[6)]
医療法人 徳洲会 札幌徳洲会病院[1)]、札幌医科大学附属病院[2)]、北海道大学病院[3)]、学校法人 日本医療大学[4)]、北海道医療大学[5)]、社会医療法人 北楡会 札幌北楡病院[6)]

【はじめに】
視野検査は視野欠損などの視野異常を検出する検査である。視野異常は様々な疾患で起こるが、中でも緑内障は初期段階では自覚症状が少ないことから未診断率が高く、日本人の失明原因の第 1 位となっている。札幌臨床検査技師会では、市民への臨床検査技師の認知度向上を目指し、様々な臨床検査を体験できる「検査 de フェスティバル」と題した市民啓発イベントを年 1 回開催しており、2023 年度は初の試みとして小型の視機能評価機を用いた視野検査のスクリーニングプログラムを体験していただいた。今回は当事業で得られた視野検査の結果について、異常所見率などについて検討を行ったので報告する。

【対象・方法】
札幌駅前通地下歩行空間において開催した 2023 年度検査 de フェスティバルに偶発的に参加し、視機能評価機アイモ scan（株式会社クリュートメディカルシステムズ）を用いた視野検査を受け、研究に同意いただいた市民 77 名を対象とし、年齢・性別・眼科受診歴の有無と、検査結果（視野異常所見の有無）との関連を調べた。

【結果】
全参加者 77 名のうち、20 名（26.0%）に視野異常所見を認めた。また有所見者のうち、眼科受診歴のない者は 8 名おり、有所見者の 40.0%、全参加者の 10.4%を占めていた。性別ごとの有所見率は女性が 21.3%、男性が 34.5%であった。年齢ごとの有所見率は 30 代以下が 6.7%、40 代が 30.0%、50 代が 15.0%、60 代が 40.0%、70 代以上が 41.2%であり、40 代から大きく有所見率が上がる傾向が得られた。

【結論】
今回の結果から、無自覚もしくは日常生活に支障を感じないレベルの視野異常を有する市民が、40 代以上から高い割合で存在していることが推測された。臨床検査技師が視野検査を担当すること、また当事業のように一般市民参加型の臨床検査体験イベントに視野検査を導入することは、潜在的視野異常患者の早期発見に、大いに寄与できると考える。（連絡先：011-890-1648）